



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	A・C・プーシキンの『ゴリューヒノ村史話』と農奴制
Author(s)	松井, 俊和
Citation	北海道大學文學部紀要, 31(2), 1-30
Issue Date	1983-01-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/33472
Type	departmental bulletin paper
File Information	31-52_PL1-30.pdf



A. C. プーシキンの

『ゴリューヒノ村史話』と農奴制

松 井 俊 和

1

A. C. プーシキンが、1830年、有名な「ボルジノの秋」に書いた小説『ゴリューヒノ村史話』⁽¹⁾は、未完のまま残されたため、あるいは1837年に雑誌「同時代人」に初めて発表されて以来、長い間、原稿の不完全な、あるいは誤まった読みとりによる不正確な形で公開されてきたりしたため、『ペールキン物語』、『スペードの女王』、『大尉の娘』といった、彼の他の散文作品と比べて、研究の遅れていた作品であるが、彼の創作史上に於いても、19世紀ロシア文学史上に於いても、注目すべき意義を持った重要な作品である。何故なら、この作品で初めてプーシキンは、ロシアの農奴制、農民・農奴を、穏やかで簡潔な、しばしば諧謔的な表現によってではあるが、領地管理人の容赦ない搾取による村の零落という鋭い状況の中でリアルに描き、後に『ドゥブロフスキー』(1833)や『大尉の娘』(1836)で発展させられる農民反乱のテーマを基礎づけたからである。更に、『史話』は、ロシア文学史上では、ゴーゴリの『死せる魂』、グリゴロヴィッチの『不幸者アントン』、ネクラソフの『誰にロシアは住みよいか』、サルトウイコフ・シチェドリンの『ある都市の歴史』、『ゴロヴリョフ家の人々』、『僻地の旧習』といった、ロシアの農奴制と農民の描写に捧げられた多くの作品の出発点に位置する作品となったのである。つまり、「この断片の影響は、その作品規模に全く不釣り合いほど大きく、特に「自然派」のリアリズムがその告発的性格によって日の

出の勢いを得ていた40年代以降はそうであった」⁽²⁾ からである。

『史話』は、物語全体の序文にあたる架空の作者ベールキンの自伝の部分と、本文にあたるゴリューヒノ村の歴史に関する叙述の部分から構成されており、序文では、ベールキンの生い立ち、軍隊やモスクワでの生活、両親の死による帰村、村での生活、如何にして文学に興味を持つ様になり、『史話』を執筆するに至ったかの経過について語られ、最後に、『史話』執筆に利用された史料が列挙されている。本文ではまず、本文の序論とも言える、ゴリューヒノ村の地理、産業、文化、風俗習慣等の叙述の後、本題に入っているが、残念ながら、プランに示されている大部の構想の発端の部分、即ち、名主トリフォンの治世の最後の年の最後の一日の村の様子と、領地管理人の到着とその統治、その結果村が零落した有様だけが描かれている。

プーシキンが、農奴制についてどう考え、どう描写したかという問題は、貴族の運命についての問題と密接に結びついており、多くの研究者の——特にソビエト期の——注意を引きつけてきた。本稿では、『史話』に於ける農奴制、農民の零落、反乱の問題等について、作品のプランを中心に、若干の検討を加えてゆく。

2

1819年の、プーシキンが、皇帝の命令に期待してではあるが、農奴制の廃止を呼びかけた有名な詩『農村』や、その他一連の詩、『エフゲニー・オネーギン』に於ける農奴農民や奴婢達の描写（タチヤーナの乳母の青春時代、イチゴ摘みの娘達のエピソード、ラーリナ夫人の農奴達に対する扱いの描写等）を想起してみれば、プーシキンが創造の初期の段階から農奴制に関心を抱いていた事が判明する。⁽³⁾ この関心は、まず第一には、彼が属している貴族階級の現状とその未来の運命に対する危機から発していると考えられる。注目すべき点は、貴族の問題が、プーシキンに於いては、農民の問題と関連させられて考えられている事である。

1822年、『18世紀ロシア史ノート』の中で、女帝アンナの時代に、専制権力を制限しようとした大貴族達の企図に触れて、プーシキン是这样書いている、「もしドルゴルーキー兄弟その他の人々の傲慢な目論見が実現していたならば、自らの諸権利、自らの力によって強大だった農奴所有者達は、農奴身分の人々の解放を困難にするか、あるいはその手段を全く絶やしてさえたかもしれない。……恐ろしい破壊のみがロシアの根深い奴隷制を亡ぼし得たであろう。現在我々の政治的自由は、農奴の解放と切離せないのである」。⁽⁴⁾ 更に、『史話』執筆の前年に書かれた『書簡体小説の断章』の中で、貴族の側からの問題提起が、主人公の一人ウラジーミルの口を通して語られている、「我々が自分達の百姓をなおざりにしているのは許し難い事だ。我々が彼らに対して権利を持てば持つほど、彼らに対して我々は義務を有しているのだ。我々は彼らを管理人の気まぐれな筈に委ねているが、その管理人というのは、百姓達を迫害し、我々の財産をかすめ取っているのだ。我々は将来の収入を抵当に入れて破産しつつあり、年をとったら貧しさであくせくする。これが我が国の貴族階級が急速に没落する原因なのだ。祖父は金持ち、息子は貧乏、孫は乞食という訳だ」。⁽⁵⁾ ここで語られているのは、貴族は自ら「百姓に対する義務」を果たす、即ち、健全な領地経営を行なわなければ貴族は没落する、という警告である。この貴族の零落についての見解が、『史話』の中で、それと表裏の関係にある農民の没落の考察の形で出されるのである。そして、1833-34年の論文『モスクワからベテルブルグへの旅』の中で、プーシキンは再び繰り返す、「農民の運命は、教育の普及につれて日毎に改良されている。……農民の幸福は地主の幸福と密接に結びついている。これは誰の目にも明らかである。勿論、大きな変化がまだ起こるに違いない。しかし、時をせいてはならない、それでなくともすでに活動的な時が来ているのだ」。⁽⁶⁾

プーシキンの関心を引きつけていた貴族の零落の問題は、当時、彼にとってのみならず、他の貴族達にとっても同様に重要な問題だった。⁽⁷⁾ 更に、根本的には、この関心の発生は、プーシキン自身の体験に基づいて

いたのは明らかである。「一般に領主直営地経営の不振は、回転資金の不足に原因しているとは当時さかんに流布していた説であるが、この資金の不足とは、領支出のはなはだしい浪費的性格という、いわば領主自身の責任において人為的にもたらされた結果にすぎないのである」。⁽⁸⁾ その結果、増大する支出を賄うために貴族達は、領地からの収入で足りない分（しばしばこの方が多かった）を、最も安易な方法、即ち、領地と農奴を抵当に入れて借金したのである。この様な一般的状況は、プーシキン家の状態にも完全にあてはまる。30年代初め、プーシキンの父親は千人以上の男子農奴を所有していたが、その中で抵当に入っていなかったのは、プーシキンに結婚祝いとして贈った、ボルジノ村の一部キステニョーフカ村の200人の農奴だけであった。⁽⁹⁾ これを相続したプーシキン自身、間もなく彼らを抵当に入れ、再抵当に入れようとさえ試みたのである。『史話』を書いた1830年の秋、彼はこの相続手続のためにボルジノにやって来たのであり、自らの財政的窮乏の問題が、村での滞在の印象と結びついて、『史話』の中で芸術的に表現されたと考えられるのである。又、プーシキンの義兄の H. H. バヴリーンチェフの手紙や、その依頼で1849年にボルジノのキステニョーフカ村を調べた Г. B. ボボエードフの報告は、『史話』を見事に例証する貴重な資料である。⁽¹⁰⁾

この様に、一面からは、同時代の地主貴族の状態、彼らの経営の零落、社会・政治的改革への期待のなさ、危機感等が、他面からは、頻繁な自然発生的な農民反乱——それらは、その自然発生性、明確な理論や指導者の欠如といった理由で崩壊を運命づけられ、破壊と流血、即ち、「不条理で無慈悲な反乱」を繰り返さずにはおられなかった——、これらの要因が『史話』の中で、農民と地主の相互関係、農民の零落の問題の考察という形で提起されたのである。

れる。⁽¹¹⁾

総体的に見てみると、19世紀後半～20世紀初めには、原稿の不十分、不正確な読みとり、資料の不足等によって、時折、個々の的確な指摘が含まれるとはいえ、概括的、素描的な批評や研究が多く、革命前後から30年代頃までは、一方にテキストロギヤの進歩に伴う、正しいテキストの構成の努力とそのための基礎的な研究があり、他方では、プーシキンを「反動家」から「革命家」に至るまで極端に解釈する傾向が現われ、40年代以降になって、先行の諸成果を十分に吸収した総体的な研究がなされる様になり、若干の問題を除いて、根本的な問題についての一定の見解が定着する様になった。

一連の著作を貫いているのは二つの明白なテーマである。即ち、「パロディ」についてのテーマと、「農奴制」についてのテーマである。『史話』のパロディ性の問題については、特にその対象（カラムジン、ポレヴォイ、カチェノフスキー、歴史家、歴史学全般等、様々な対象が指摘された）の問題と関連して、主として20年代以前に色々と論じられたが、現在に至るまで、研究史上で確固たる地位を占めている。たとえば、A. И. レヴァキンは、「ジャンル＝形態の特質の点で、この作品は、思想穩健な半官的歴史、特にカラムジンの『ロシア国史』に対するパロディである、というプーシキン研究者達の主張は正しい様に思われる」⁽¹²⁾と、その著書で述べている。

ここでは、本稿のテーマである『史話』の農奴制の問題に関連した諸見解を概観してみよう。

『史話』の農奴制の描写の問題は、特にソビエト期の研究者達の注意を強く引きつけたのであるが、それは、「一連の物語作品（『ゴリューヒノ村史話』、『ドゥプロフスキー』、『大尉の娘』、最後のロマンと関連している『プガチョフ史』は言うまでもない）に於いて、根本的なテーマは、農民達の中途半端で頻繁な反抗から、エメリヤン・プガチョフ指揮の農民戦争に至るまでの、農奴制に抗する農奴農民の斗争である」⁽¹³⁾からだった。しかし、革命以前にも、この問題に関する指摘は存在していた。

B. Γ. ペリンスキーは、『史話』については極めてわずかの発言しか残していない。『『ゴローヒノ村年代記』は、鋭い、愛すべき、面白い笑話^{シュートカ}的な小品である。しかし、この中には真面目な事柄もある。たとえば、ゴローヒノ村への領地管理人の到着と彼の統治の場面である」。⁽¹⁴⁾ 彼のこの指摘は、その簡略さにも拘わらず、後の多くの研究者達の著作を考慮に入れると、管理人の統治に注意を向けた点で、極めて先見の明あるものであった。

『史話』の農奴制の描写についての、H. H. ストラーフ、H. И. チェルニャエフの意見は、ソビエト期の研究者達によってあたかも軽視されているかの様であるが、個々の正しい指摘を含んでおり、恐らく、肯定的な意味でも、否定的な意味でも、以後の研究者達の研究に大きな刺激を与えた事は疑いの余地がない。⁽¹⁵⁾ 特に、ストラーフの、「パロディ」の問題に関する見解は一連の議論を生じさせたのである。

A. イスコスは、『史話』の根底にはボルジノ村の印象があり、プーシキンはそれに基づいてニコライ時代の農村ロシア全体を描写したと指摘して、こう書いた、『『ゴリューヒノ村史話』は風刺ではなく、全ロシア、この巨大な「ゴリューヒノ村」全体に対する、表現し難い憂愁に満ちた、深い皮肉である。……この、^{プーシキン}芸術家によって考え出された、ロシアの生活の光景の、全てを包含する巾広さの中に、あるいは、何ら社会的・政治的目的に身を入れていないペールキンの素朴な調子で語られる恐ろしい真実、農奴制に対する最も恐ろしい非難となっている尽きる事のない重苦しい真実の中に、疑いもなく、『ゴリューヒノ村史話』の主要な意味と意義があるのである」。⁽¹⁶⁾

革命以前および革命以後しばらくの間、大部分の著作は、プーシキンの作品の中に農奴制の描写がある、あるいは一歩進んで、それらの描写は鋭い、という様な指摘と、問題提起の段階にとどまり、総体的な研究にまでは至っていなかった。

И. E. シチュゴレフは、1928年、その名著『プーシキンと農民』の中で、A. イスコスの見解を発展させ、『史話』とボルジノ村の現実との

興味深い対比を行い、プーシキン家の財政状況を検討し、『史話』の中に、プーシキン家の領地と農民の状態についての芸術的報告を見出して、こう結論している、「地主の問題、あるいは同様に、農民の問題、これがボルジノの秋に、プーシキンが周囲の奴隷制の日常慣習を観察し、思索した中から生まれて来た『史話』の根本的テーマである。……勿論『ゴリューヒノ史』の中でプーシキンの関心を引いていたのは、作品の文学的形式でも、歴史家達に対するパロディの皮肉でもなく、新しい社会的状況の中で彼の前に開けた人生の真実なのである」。⁽¹⁷⁾『史話』がボルジノの印象に基づいているという彼の见解は、豊富な資料によって実証されており、揺ぎないものになっているが、「厳格さが、農民にとって、あるいはより正確には地主経営にとって有益である、という作者の信念を強調する必要がある」⁽¹⁸⁾という彼の意見は、更に詳しく検討されねばならないだろう。総じて、シチョーゴレフのこの著作は、詩人の現実の生活に関する詳細な実証的研究を通して彼の創作を研究するという方法の点で際立っており、現在でもその存在価値と影響力を失っていないと言える。又、シチョーゴレフの意見からも判明する様に、パロディについての問題は、この頃から、研究史上で背後に退き、農奴制の問題の検討が優位を占める様になって来る。

プーシキンをデカブリズムの詩人・歌い手と考え、『史話』をニコライ時代の全ロシアを象徴する注目すべき記念碑とみなして、H. H. フェートフはこう述べた、「プーシキンは農民革命の可能性を、以前の様には信じていなかった。デカブリスト蜂起の体験は、当時、蜂起という手段による変革の夢想が望みなきものである事を彼に確信させた。しかし、ロシアに於ける社会・政治機構の変革の必要性についての思想そのものは、以前通りプーシキンの秘めた考えであった」。⁽¹⁹⁾しかしフェートフは、この「農民革命」が一体如何なるものなのか説明していない。

1931年、Д. Д. ブラゴイは、有名な、しかし議論の余地ある著書『プーシキンの創造の社会学』の中で、断固たる調子で次の様な結論を下した。即ち、

A C. プーシキンの『ゴリユーヒノ村史話』と農奴制

『ベールキン物語』のベールキンの村——ゴリユーヒノ、
『史話』のベールキンの村——ゴリユーヒノ、
『ドゥブロフスキー』のドゥブロフスキーの村——キステニョーフ
カ、

プーシキン自身の村——キステニョーフカ（キステニョーフォ）

『史話』のベールキンと、ドゥブロフスキーが自分達の村へ帰る時
の描写がほとんど同じ、

プーシキンのキステニョーフカ村には、ゴリユーノフという農民が
いた、

従って、「ゴリユーヒノ村の赤貧の地主ベールキン、これは、キステニョーフォの赤貧の地主プーシキンである」。⁽²⁰⁾ 以後、多くの研究者によって、ボルジノ＝キステニョーフカがゴリユーヒノのプロトタイプであり、ベールキンの文学の対象の変化（叙事詩→悲劇→バラード→散文→歴史）が、プーシキンのそれに酷似している事が確認されるのであるが、ブラゴイのこの絶対的同一視は行き過ぎであると見なされねばならない。これは、この時期、プーシキンについて、あたかも彼が「農民革命」、革命思想のイデオログであるかの様な「革命的解釈」が現われたのであるが、ブラゴイがその影響を受けたのだと考えられる。

『史話』に関する一連の著作の中で、恐らく初めて本格的にその言語の問題に取り組んだ、E. A. アクーロヴァは、農奴制に関して以下の様な総括を行なった、「(1) プーシキンのパロディ的・風刺的作品『ゴリユーヒノ村史話』は、彼の反農奴制的気分、暴政非難、社会的不満の表現の積極的形式としての反乱の認知、について語っている。……(6)『ゴリユーヒノ村史話』は、『ドゥブロフスキー』と『大尉の娘』の出現を準備し、ロシア文学の発展の全体面では、ネクラソフの物語詩『誰にロシアは住みよいか』や、サルトゥイコフ・シチェドリンのパロディ・風刺『ある都市の歴史』を準備した」。⁽²¹⁾ この総括は、『史話』の研究の成果を簡略に示しているが、残念ながら、彼女のテーマとしたところの言語の問題については、以後、詳細な研究はまだ現われていない。

『史話』のテキストの確立に多大な貢献をした B. トマシェフスキー

は、プーシキンの作品の中で、貴族の問題と農民の問題が結びついている事に注意を向けて、こう記した、「ロシア史の諸事件の概観の中で、プーシキンは、一つのプロセスの二つの側面に立ち止まる。即ち、ロシアの革命は、その未来の諸形式に於いて、プーシキンには、農奴制の崩壊の結果であると思われた。これ故、彼の注意は一面からはロシアの貴族の土地所有、総じて大中貴族の運命に、他面からは、彼がその中に唯一の革命的勢力を見出していたロシア農民の運命に引きつけられたのである。そして、貴族の土地所有の崩壊をプーシキンは、農民革命の問題と切離さずに見ていたのである」。⁽²²⁾ 第2節で引用したプーシキンの幾つかの見解から見て、ここで言われている「革命」が、現代的な意味の「革命」ではない事は明らかである。むしろ、それは「改革」、「改良」といった言葉の方がふさわしいと思われるのである。

その俗悪社会学的傾向を批判された M. И. マリツェフは、『史話』を「ラジーンチェフの散文の伝統を継続する、政治的風刺の極めて独特の作品」⁽²³⁾とみなした。

H. B. イズマイロフは、『史話』の研究の未解決の点に触れている。「その社会的本質、風刺的、反農奴制的傾向は、以前より良く研究されている（すでに、1928年、П. E. シチョーゴレフは、著書『プーシキンと農民』の中で、その上に『史話』が生まれたところの現実の地盤、『史話』のために役立った現実の材料を解明した）。しかしプーシキンは自分の風刺の中で、同時代の、あるいは過去の歴史家達をパロディにしたのかどうか、一体誰をパロディにしたのか、という問題、又、もう一つの少なからず重要な問題——『ベールキン物語』に於けるよりもずっと鋭く『史話』の中に現われているベールキンの個性についての問題——が、議論の余地を残している。……『ゴリューヒノ村史話』から、「農民」のテーマが、極めて鋭く、深く、プーシキンの散文創造の中に入ったのである。……（プーシキンの創造に於ける）「農民」のテーマの発展は、その全ての現われの中に於いて、まだ不十分にしか研究されていない」。⁽²⁴⁾ 現在では、彼が指摘した不十分な点の幾つかは、すでに解決

されたと考える事が出来る。

A. Г. グカーソヴァは、C. ヴェンゲロフがそのプーシキン作品集の中で検討した表題の表記についての問題に新しい解釈を加えた。即ち、グカーソヴァは、ヴェンゲロフが退けた「ゴローヒノ (Горохино)」が、記述の誤りではなく、意識的になされたものであると考えた。彼女は、「ゴローヒノ」と「ゴリュウヒノ (Горюхино)」, あるいは「ゴローヒノ村民 (горохинцы)」と「ゴリュウヒノ村民 (горюхинцы)」が、どのようなコンテキストで使われているかを検討して、こう結論している、「作品は、遠い太古の神話的時代、即ち、正にゴロフ王の時代から存在し、かつてはゴローヒノという名を持っていた村の歴史として考え出された。ゴローヒノ村はあった。しかし、それはゴリュウヒノ村として理解され始めた。即ち、漸次の衰退と貧困化の過程でゴローヒノ村は民衆の間でゴリュウヒノの名を得たのである」。⁽²⁵⁾ この新しい解釈は、「ゴローヒノ」という表記の持つ意味を再評価させ、これについての更に詳細な研究を要求している。

以上の概観によって、『史話』が、ロシアの農奴制に対する鋭い風刺、あるいは批判である、という見解が共通したものである事を、我々は知るのである。

4

『史話』のプランを検討し、未完の原稿とプランとを対比してみると、我々は、作品の構想がどんなものだったか、プランはどの程度まで実現されたのか、テキストの諸断片の配置はどのような形が構想に最も合致しているのか、等について理解出来る様になる。テキストの断片の配置に関しては、プーシキンの作品集の編集者達や B. トマシェフスキーらの努力によって、現在では基本的には解決されたと言い得る。⁽²⁶⁾ この過程で最も重要な成果は、いわゆる「有史時代」(ゴリュウヒノ村の地理、産業、文化、風俗習慣等が叙述されている部分)が、「神話時代」(名

主トリフォンと領地管理人の統治について叙述されている部分)の前に移された事であり、この配列が、叙述の一貫性の点でより構想に合致しているのは疑いない。又、『ゴローヒノ村年代記』という名称が『ゴリユーヒノ村史話』に変えられた事も、少なからず重要な点であった。

本稿に関係ある、プランの後半部を引用してみよう。

- (1) Геогр. афическое обозрение деревни.
- (2) Баснословные времена
- (3) Правление Старосты [Антипа Мудрого]
- (4) Приезд моего прадеда тирана Ив. В. Т.
- (5) [Бунт]—дед мой управляет. Пожар
- (6) Соседи. Повальная болезнь. Церковная ист. ория
- (7) Мужики разорены. Отец мой. Стар. Приказчик. Бунт.
- (8) Приказчик
- (9) [Мирск. ая сходка бунт.]
- (10) (Нрзб.) барщ. ина
- (11) Была богатая вольная деревня
- (12) Обеднела от тиранства
- (13) Поправилась от стр. огости
- (14) Пришла в упадок от нерадения —
.....
- (15) Семеств⁽²⁷⁾

このプランから判明する事は、『史話』のゴリユーヒノ村の歴史の部分が、後述する様に、大部分が書かれなかった事、プランの項目が削除、訂正、加筆等の修正を多く受けている事である。

プラン(1)の「村の地理的概観」は、未完のテキストの、いわゆる「有史時代」の記述に相当している(「その首都の名をとってゴリユーヒノと呼ばれているこの地方は、地球上に 240 デンチャチン以上の土地を占めている。……さて、以上の様にゴリユーヒノの人種誌学的、統計的状态と、住民の風俗習慣を読者に紹介したので、今度は物語そのものに取り

かかろう)。(28) テキストから判断すると、この部分はほとんど完全に書かれたと考えられる。プラン(2)の「神話時代」は、テキストでは「名主トリフォン」と「管理人**の治世」の二つの部分からなっているが、実際にこの名称に合致しているのは、「名主トリフォン」の部分の最初の方の「ゴリューヒノの創設、その最初の住民については、不明の闇に覆われている。得体の知れぬ伝説は、かつてゴリューヒノが富裕で広い村であった事を告げている。……牛飼い達は、長靴をはいて群れの番をしたそうである」(29) の箇所だけである。この後に、農民達の代表(「村団の寄合いと呼ばれる民会で住民に選ばれる世話役」^{グエーチエ}、「村団の選んだ名主」^{スタルツナー}による統治が始まる。「神話時代」の冒頭に、「ゴリューヒノ村では、統治形態が何度か変わった。それは、村団によって選ばれる世話役の支配下、次に地主達に任命された領地管理人、最後に地主達自身の直接の支配という風に順次移っていったのである。これらの異なる統治形態の得失については、私の物語の進行につれて発展させられるだろう」(30) という記述があり、これによって、プラン(3)の「名主の統治」が三つの統治形態の最初のものである事が判明する。しかし、彼ら農民の代表者の統治の中で実際に書かれたのは、最後の名主トリフォンの治世の最後の年の最後の日だけであり、他には、名主アントンのペテン行為が禿頭のアルヒープの「風刺的」な詩の中でわずかに言及されているにすぎない。彼らの統治の間にベールキン家の領地は次第に衰微していった。

『書簡体小説の断章』でヴラジーミルの語った見解がここで再び語られている。「ゴリューヒノ村は大昔から有名なベールキン一族のものであった。しかし私の祖先達は他に多くの世襲領地を持っていたので、この遠く離れた地方には注意を払わなかった。ゴリューヒノは少額の年貢を払い、村団の寄合いと呼ばれる民会で住民に選ばれる世話役達に支配されていた。しかし、月日のたつにつれて、ベールキン家の父祖伝来の領地は細分され、衰微していった。金持ちだった祖父の貧乏になった孫達は、自分達の贅沢の習慣を棄てる事が出来ず、すでに十分の一に縮まっている領地から以前通りの十分な収入を要求した。恐ろしい命令が次々

に出された。名主はそれを村会^{ヴェーチエ}で読み、世話役は長広舌を振るう。村団は大騒ぎをする——ところが主人達は、二倍の年貢の代わりに、脂だらけの紙に書かれ、銅貨で封印された、ずるがしこい言い訳や、温順な哀訴の手紙を受取ったのである」。⁽³¹⁾ ここでプーシキンは、領地の細分化と贅沢の習慣という二つの要因を示している。昔は広大で十分にあった領地の、財産相続による分割、そして恐らく抵当に入れられて借金を返せず競売に付されたための減少の結果、分割された領地を受取った個々の地主——貧しい孫達——の収入は減少する。ところが他方では商品経済の侵透により生活のための支出は増える一方である。従って農民達にますます多くの年貢を要求する様になる。しかし農民達の生産する量がそんなに増えるものではない。彼らは年貢を納めるところか言い訳をして免れようとする。業をにやしたであろう地主が領地管理人を送って彼らから絞り取ろうとする考えを抱くのは当然である。管理人が登場する必然性がここで用意されているのである。プラン14の「怠慢ゆえに衰微した」は、何を意味しているのか？ 農民達の怠慢だろうか？——「住民達は夫として働かず気楽に暮していた」、「男子は……勤勉である（特に自分の畑では）」、即ち、他人の畑—地主の畑では夫として勤勉ではない。あるいは地主達の怠慢だろうか？——「私の祖先達は……この遠く離れた地方には注意を払わなかった」。この怠慢は、農民の側からすれば、彼らの暮らしを楽にする訳では決してない耕作に対する不熱心、地主の側からすれば、経営を向上させようとする努力の欠如といった事を指すのだろう。いずれの場合も、経営にとって有害な事は明らかである。

最後の名主トリフォンの治世の最後の日に、領地管理人**が、地主の委任状を持って村に到着する。彼が到着した時、村は教会の祭礼の日で、村人達は酔払っていた名主、書記を始めとして、皆陽気に浮かれ騒いでいる真最中であった。明日からの管理人の酷政に対して、この祭礼の日は、あたかも消え入る寸前のロウソクの最後の輝きにも似て、彼らの運命の明暗を見事に示している。この管理人の到着は、統治の第二の形態の開始を告げている。彼のこの上なく巧妙な「政治システム」——

その根本原理は「百姓は金を持てば持つほど増長し、貧しければ貧しいほど温順である」という公理である——の結果、村は完全に零落するのである。彼は、滞納額を富農に肩がわりさせ、遊びほうけている者を耕作に出し、その者が十分働かねば作男にして抱え主より年貢を取り、富農から先に徴兵を行って彼らから身代金を取り、年貢は一度に集めるのではなく絶えず少しづつ徴集した。即ち、彼はありとあらゆる方法を動員して彼らを丸裸にしたのである。余りの酷政にゴリューヒノ村民達はこう申し立てた、「非道な領地管理人はアントン・チモフェーエフに足枷をはめた。チモフェイ老人は100ルーブリの身代金を払って息子を請出した。又、管理人はペトルーシカ・エレメーエフにも足枷をはめ、父親は68ルーブリで請出した。更に、非道な管理人はリョーハ・タラーソフにも足枷をはめようと望んだが、彼は森に逃げ、管理人は、その事を極めて悲しみ猛烈に怒った。又、酔払いのヴァーニカは町に引立てられ新兵にやられた。(ゴリューヒノ百姓の申し立て)」。⁽³²⁾ こうして、「三年の間に、ゴリューヒノ村は完全に零落した。ゴリューヒノ村は憂いに沈み、市場はさびれ、禿頭のアルヒーブの歌も歌われなくなった。子供らは乞食して歩いた。自分の畑を耕すのは農夫の半分だけで、あとの半分は作男になってしまった。教会の祭礼の日は、年代記作者の表現によれば、欣喜雀躍の日ではなく、悲哀と悲しい追善の年祭になったのである」。⁽³³⁾ この零落の光景をもって、プーシキンは、農民の厳しい搾取が農民をして全てを失なわせる重要な要因の一つ、恐らく最も重要なものとして示している。地主が十分な収入に依拠して気楽に暮していれば、農民達にも余り注意を払わず、従って農民達も気楽に暮してゆける。ところが地主の財政が逼迫して来ると、農民にそのしわ寄せがかかる。地主が更に窮乏して来ると、農民も更に絞り取られる。その結果、農民がどう仕様もなくなる時、恐らく地主の運命も決定されるだろう。正に、農民と地主の利害は見事に一致しているのである。

物語は、ゴリューヒノ村の完全な零落の描写で中断された。『史話』の中の予告によれば、この後に第三の統治形態である地主の直接の支配

が続くはずだったが、それは結局書かれなかった。ただ、我々は『ペールキン物語』の序文のネナラードヴォの地主の手紙や、『史話』のペールキンの自伝の部分から、ペールキンの父親の経営の一端とペールキンの経営に対する熱意の程度を知る事が出来る。このネナラードヴォの地主の手紙は興味深い内容を持っている、「(ペールキンの) 亡父は金持ちではありませんでしたが、中位の財産を持ち、経営の分野では極めて如才ない人間でした。……領地の経営に取りかかると、イヴァン・ペトロヴィチ (ペールキン) は、無経験と温厚さのためにじきに経営を放り出し、亡き父が敷いた厳格な秩序を弛緩させてしまったのです」。⁽⁸⁴⁾ その結果、村の管理は、何ら経営能力のない女中頭の老婆に委ねられ、村人は主人に対して詐欺を働く様になり、免租を強要したり、人頭税を払わぬ者さえ出て来るのである。経営に対する「怠慢」はこうして彼自身の頭上に災いをもたらす。ネナラードヴォの地主はペールキンの中に、「我が国の若い貴族達に共通の弱さと破滅の基になる怠慢」⁽⁸⁵⁾を見出しているが、この言葉は、彼ら若い貴族達の未来を暗示して極めて興味深いのである。

ゴリューヒノの零落によって、地主の直接統治の開始の必然性もある程度推測出来る様になる。恐らく彼らは、村からの収入が余りにも少なくなったので、都会で暮す事が出来なくなり、経営を建て直すためにも村にいて直接統治する必要性を理解したに違いない。

書かれなかった事柄について、プランを基にして検討してみよう。

プランの中で最も研究者達の注意を引きつけたのは、三度書かれて、二度消された「反乱」という言葉である。これは、プーシキンがこの言葉をどこに入れるべきか苦労した事を物語っている。結局、反乱の場面は『史話』の中で書かれなかったので、これに関して幾つかの解釈を生んだ。M. П. アレクセーエフの解釈を引用してみよう、「ペールキンの『史話』は、プログラムから判断すると、正に反乱の場面そのものの前で中断した。二度削除された「反乱」という言葉は最後に一番終りに置かれた。あたかも、プーシキンには読者をしてその様な結末に更に準備

させ、その結末をもっと自然で、真実らしく、内面的に正当なものにする必要があったかの様である。名主アンチープ（テキストではこの名はトリフォンに変えられている）の統治、村団の寄合いを廃し独特の政治的システムを確立した管理人の到着——ここで現存のテキストは終わっている——は、憂いに沈んだゴリュ－ヒノ村民の蜂起には不十分な動機であると思われた。そこでプーシキンは自分のプランの中で「反乱」を消し、再びそれを「私の曾祖父、暴君の到着」の後に置いたが、この動機も不十分であった。そこで「火事」と「疫病」が付け加えられる。ここに物語の絶頂がある。零落は限界まで達した。全ての不幸が体験される。ゴリュ－ヒノ村民は絶望に至った。今度こそ、プーシキンの構想によれば、『史話』を反乱の場面で終らせねばならなかった。それは効果的なフィナーレとして容易に利用されたであろう。⁽³⁶⁾ アレクセーエフは、農民達が様々の不幸、災厄を体験し尽して最後に一度、堪えきれずに反乱を起こすのだと、解釈している。一方、A. Γ. グカーソヴァは三つの反乱をある程度同権のものとして理解した、「反乱」という言葉は『ゴリュ－ヒノ村史話』の中で三度言及されている。第一の「反乱」は欄外に、消された行「村団の寄合い」の下に書かれ、その上には「管理人」という言葉がある。即ち、反乱は統治のあり得る形態のバリエーションの一つ——管理人の統治——の後に続く。第二の「反乱」は、「私の曾祖父、暴君の到着」という言葉の後に続く。一方、欄外には、「^{ペールンチナ}賦役」という言葉が読める。即ち、反乱は「三つの統治形態」の第二のバリエーション——地主・暴君の統治——の後なのである。この後に「私の祖父が統治する。火事。疫病。教会史。農民達、零落する」という行が続き、最後に「私の父、名主、管理人……」。即ち、「三つの統治形態」全ての後に反乱があるのである。もう一つの極めて重要な状況に注目しよう。

(1)「反乱」はプーシキンの作品では、それぞれが言及されている統治形態の各々の結果である。(2)しかし最後の「反乱」、即ち、第3の反乱は、明らかに決して圧制者ではない父親の治政に、順を追って確立した統治の三つの形態全ての、あたかも結果、帰結であるかの様であり、これは

プーシキンの歴史的視野がどれ程巾広く深いものであったかという問を
 解明しながら、特別の意味を持っている」。(37) しかし、この引用文中の
 (2)の点については再考を要する。最後の反乱についても、前二者との関
 連の中で捉えるのではなく、何かこの反乱を誘発し得たそれだけの原因
 があったと考える方が妥当ではないだろうか。父親は確かに曾祖父の様
 な「圧制者・暴君」ではなかったかもしれない。しかし、前述したネナ
 ラードヴォの地主の手紙によれば、「経営には如才なく、厳格な秩序を
 敷いていた」のであり、彼の治世の言及の前には、「百姓たち、零落す
 る」という記述があるのである。

前述の様に、ゴリューヒノ村の統治形態は、名主—管理人—地主の順
 で交替していった。この順序に従い、『史話』に書かれている情報を基
 にして表を作ってみると、以下の様になる。

ロシア史の出来事	『史話』の出来事	プラン
	(1)世話役・名主の統治 名主アントン 最後の名主トリフォンと書記アヴデエイ	① ② ③
	(2)領地管理人の統治 管理人**	⑧ ⑨
1741- (エリザヴェータ)	(3)地主の統治 1744- (20年間) 曾祖父の統治	④ ⑩ ↑
1762= (エカチェリーナ)	1767= (35年間) 祖父の統治	⑤ ⑥ ⑦ ↓
1770- モスクワに疫病	1764頃 書記のテレンチャ	
1771- プガチョフの乱	管理人ガルボヴィツキー (ゴルボ ヴィツキー) その愛人アグラフェナ・トリフォ ーノヴナ アグラフェナの息子の名主のアヴ デエイ	
1773- 1775-		
1796- (アレクサンドル)	1799= (25年間) 父の統治	⑦
1801-		
1825-	1824- ベールキン、両親の死により帰村	

この表から我々は極めて興味深い事実を知る事が出来る。即ち、曾祖父、祖父、父の各々の統治期間がそれぞれ、エリザヴェータ、エカチェリーナ、アレクサンドルといった国の最高権力者の治世の期間とほとんど合致している点である。むしろ、プーシキンが数年ずつ、その期間を意識的にずらしたのだとさえ言い得るのである。この合致は重要な意味を持っている。エリザヴェータの治世で、貴族は農奴に対する絶対的な特権を獲得し、エカチェリーナの治世では、農民の搾取が一段と強化され、大部分の農民がますます貧困化し、1773年にはプガチョフの指揮する大農民反乱が帝国を震撼させた。アレクサンドルの治世では、祖国戦争による国土の荒廃が貴族、農民を共に苦しめ、農民反乱が多発し、農奴制機構を見直す必要性が意識され始めたのである。プーシキンが『18世紀ロシア史ノート』でエカチェリーナの治世に強く興味を引かれた事や、『史話』以後にプガチョフの乱の研究に没頭する事実からも、彼がこれら諸事件、特にプガチョフの乱に注目していたと考える根拠があるのである。又、前述の合致は、ゴリューヒノ村がロシアである、という見解をも明瞭に証明してもいる。⁽³⁸⁾

プガチョフの乱は1773年に起こり、これは祖父の統治の時期にあたっている。『大尉の娘』の主人公ピョートル・グリニョフが祖父の世代に属している事も有力な資料となり得る。従って、しばしば指摘されている様に、プーシキンの書いた「反乱」のどれかがプガチョフの乱を考えに入れているものとすれば、それはプラン(5)の「反乱」が最も可能性の高いものであると考えられる。⁽³⁹⁾

それでは、プーシキンはどの様な「反乱」を描こうとしていたのだろうか？この「反乱」という言葉には、^{ブント}プガチョフの乱の様な大規模な、農民戦争と呼び得る様な、正しく「反乱」から、ずっと規模の小さい「一揆」や「暴動」、更には「反抗的な態度」といったものまで含まれる。『大尉の娘』の省略された章で、グリニョフが両親の村に帰った時、道を塞いだ木柵によって彼は止められ、棒を持った見張りの農民はこう言う、「Да мы, батюшка, бунтуем」。⁽⁴⁰⁾『ドゥブロフスキー』では、富裕

な貴族が不法に奪ったドゥブロフスキーの屋敷、農民を接収しにやって来た警察署長達に対して、農民達が、口答えをすると、署長は、「Да это быт !」と叫ぶのである。⁽⁴¹⁾ 農民達の反乱、反抗はしばしば恐ろしい殺人を伴う。『モスクワからペテルブルグへの旅』の「水門」の章でプーシキンは、ラジーシチェフがその著書で描いた地主のエピソードに触れて、こう書いている、「ラジーシチェフによって描かれた地主は、かつて15年ほど以前に私が知っていた一人の地主の事を思い出させた。……彼は暴君であった……三年の内に農民を苛酷な状態に導いた。農民は何の財産も持たず、地主のやせ馬につけられた地主の鋤で耕やし、自分の家畜は全て売り、……彼は自分の農民を困窮に、仕事に、忍耐に慣らすと、次第に彼らを富ませ、財産を返し、権利を与えようと考えたのである！運命は彼に自分のこの予定を実行する事を許さなかった。彼は火事の時に、自分の農民に殺されたのである」。⁽⁴²⁾ ゴリューヒノ村の場合と同様、プーシキンには、「三年」という期間が、村が完全に零落するのに十分な期間であると思われたのである。

M. E. サルトゥイコフ・シチェドリンは、『僻地の旧習』の中で、二つの殺人を描いている。主人公の叔母の一人は、僕婢達を虐待し、女中頭や小間使い達によって枕で窒息させられ（第8章）、近隣のある地主は残虐な暴君で、嫌悪すべきハーレムを作っていたが、ある夜、領地全体の農民（30人ほど）に、足を縛られ天井から吊されて家ごと焼き殺されるのである（第30章）。⁽⁴³⁾

この様に、「反乱」は様々な原因——最も多くの場合、地主の暴虐であろう——により、様々の規模で起こり得るものである。火事や疫病や飢餓等も原因になり得るのである。しかし、プーシキンが『史話』の中で描こうとした反乱は、作品に描かれている舞台の規模から見て、プガチョフの乱の様な大規模なものでは決してなく、ゴリューヒノ村の村境を越えない程度のものではあったろう。勿論、プガチョフの乱に触発されて村内で起こり得た反乱が描かれた可能性は否定出来ないが、その場合でも単独存在のものとして描かれたに違いない。何故なら、作品のテ-

マはゴリューヒノ村の内部でのみ発展しているからである。この点で、
B. トマシエフスキーの指摘は正しい。「ゴリューヒノの農民達の反乱は、ベールキンの年代記のパロディ的枠組の中では、大きな規模を得る事は出来なかった。そして、恐らくプーシキンは、貧窮した領地の零落した農民達の悲しい歴史のエピソードとしてのみ考えたのであろう」。⁽⁴⁴⁾
反乱についての若干の総括を行なってみよう。

(1) M. П. アレクセーエフの見解に反して、それぞれ三つの反乱が起こり得た可能性がある。即ち、プラン(9)の反乱は、管理人の苛酷な統治の結果として、(5)の反乱は、暴君である曾祖父の統治の結果として、(7)の反乱は、恐らく「百姓達、零落する」の結果として。

(2) もしプラン(5)項「[Бунт]—дед мой управляет」を、暴君の曾祖父と関連させずに、「反乱が起こった時、私の祖父が統治している」と解釈するならば、この反乱は明らかにプガチョフの乱を暗示し得る様になり、それは物語の風刺性をより鋭くするだろう。

(3) 反乱は、あくまで村の中でのみ起こり得る規模だったに違いない。しかし、『史話』の持つ象徴性——ロシア全体を暗示する——を考慮に入れるならば、プガチョフの乱の暗示性も正当化される。この点にも、前述の年代設定の場合と同様、プーシキンの巧妙なカムフラージュがある様に思われる。

プラン(5)項の「火事」、(6)項の「疫病」についてはその内容を比較的に容易に推定出来る。「火事」は前述の『モスクワからペテルブルグへの旅』のある地主のエピソードを想起させるが、勿論、普通の火事かもしれない。シCHEDロリンの短篇『村の火事』には、火事の結果「百姓達はあっという間に全てを失い、乞食になってしまった」⁽⁴⁵⁾という描写がある。いずれにしても、火事は農民にとって災厄の原因（あるいは結果）であり、彼らの不幸と密接に結びついている。「疫病」もそうである。プーシキンは、恐らくまず第一に、彼をボルジノに閉じこめ、各地に農民の騒擾を引き起こしていた1830年秋のコレラ流行を念頭に置いていたに違いない。

プラン(6)の「隣人達」は、いわゆる「有史時代」の冒頭で述べられている、ジェリウーホヴォ、ペルクーホヴォ等の村を想起させる。この二つの村の住民が貧しく矮少である一方、カラーチェヴォの自由な耕作者が「性情の荒々しい残忍さで有名な、すこぶる迷惑な隣人」⁽⁴⁶⁾という対比は興味深い。これら近隣の村々で何かが起こったのか、あるいはゴリュエーヒノ村民が彼らと何らかの接触を有するのか、推定は困難である。

プラン(6)項の「教会史」は、恐らく、ベールキンが『史話』のためにその年代記を利用したゴリュエーヒノ村の役僧に関係しているだろう。「恐らくプーシキンは、教会の代表者達の活動をも示そうとしていたのだろう。『ゴリュエーヒノ村史話』の全体のパロディ・風刺的性格は、僧侶階級も彼によって同様に風刺的に描かれたであろうと推定させ得るのである」⁽⁴⁷⁾更に、教会の歴史という点で、かつて修道院や教会が大農奴所有者であった時代があった事が考慮に入れられていたのかもしれない。

プラン(11)～(14)の項目は、(1)～(10)の項目——それらは村の歴史に於ける様々の出来事を大体年代順に示している——とは異り、プーシキンが領地経営の盛衰の原因を主体的な要素から検討しようとしていた事を示すものだろう。同時にこれらは、『史話』のプランの根底に横たわる大プランとも考え得る。プランの中でこれらは欄外に書かれているので、恐らくプーシキンは(1)～(10)を書いてから、あるいはその途中で、これら要因について列挙したのであろう。(11)の「豊かで自由な村だった」が恐らく物語の冒頭に置かれたのは間違いないが、他は、たとえば(12)の「暴虐」が(4)の「曾祖父－暴君」との連想を引き起こし得るだけで、どの項目に合致するのかを判断するのは難しい。強いて挙げれば、「厳格」は父の治世に、そして「怠慢」は子、即ちベールキンの治世にあてはまり得る。しかし、これらの項目は、プーシキンが、暴虐、厳格、怠慢といった事柄を、領地経営の成功、不成功を決定する重要な主体的な要素と考えていた事を示している、と考えるのが妥当であろう。シチェドリノの『僻地の旧習』の主人公の母親、やり手のアンナ・パーヴロヴナや、C.

T. アクサーコフの『家族の記録』の主人公バグロフ老人等は、厳格に、前者は特に加えて吝嗇に、経営を行い財産を増やしており、怠慢の例としては、まず第一にペールキン自身を挙げる事が出来る。

我々は以上で、プーシキンの構想を、文中の予告に従って「名主—管理人—地主」の順の統治で叙述されているものとして考え、残されたテキストを曾祖父の統治の前に位置するものと解釈した。しかし、ここでもう一つの重要な点を見逃してはならない。つまり、名主の治世と管理人の統治に関する現存の描写は、それより以後の時代、即ち、地主の統治の時期と重ねて考える事が出来るのである。地主の統治下に於いても、名主、管理人の存在は否定出来ない。この事は前述の表からも判明する。たとえば、管理人が読みあげた地主の委任状についての備考の欄に我々はこう読むのである、「(NB “Грамоту грозновещую сию списах я у Трифона старосты, у негоже хранилася она в кивоте вместе с другими памятниками владычества его над Горюхином.” Я не мог сам <?> отыскать сего любопытного письма)」。⁽⁴⁸⁾ これを、「トリフォンが住んでいた家」ではなく「トリフォンが住んでいる家」と解釈する事は出来ないだろうか。そうすれば、プラン(7)の父の時代の「Стар. Прпказчик」の記述が、この点で重要な意味を持って来るのである。A. Г. グカーソヴァは、ゴリュエーヒノの地理、風俗の描写を検討しながら、「我々は、プーシキンが現在起こっている事を過去の時代にあわせて、正にこれらの断片（たとえば、ゴリュエーヒノの女達についての描写のこと—引用者）の修正を原稿の中に意識的に持ちこんだと推定する」⁽⁴⁹⁾と指摘しているが、これは以上の点からも明らかである。プーシキンは、この様に意識的にカムフラージュを行なって、『史話』の歴史の中で同時代性を強調したのである。

以上の検討により、プランの中で予定されていた様々な事柄は、プーシキンが農奴制をほぼ一世紀にわたってその多面的な現われの中で描こうとしていた事を示している、と我々は結論する事が出来る。従って『史話』は始められたばかりで中断された、と確固として言えるのであ

る。この作品の中で、プーシキンは、貴族・地主と農民・農奴の相互関係、特に彼らの経済的な関係が、地主にとっても農奴にとっても最も重要である事を示した。正にこの点で貴族は農民と「切り離せない」のである。反乱については、プーシキンが『史話』の中でまず第一に描こうとしたのは、農民の反乱の歴史的、経済的原因についての考察であったろう。実際に農民が反乱を起こすのは、1832-33年に書かれた『ドゥプロフスキー』に於いてである。しかし、この反乱は、貴族青年ドゥプロフスキーに指揮された農民強盗団という形の中で具体化され、しかも首領ドゥプロフスキーの個人的怨恨とか、農民達の、若旦那に対する農奴的愛着と暴君トロエクーロフへの嫌悪から盗賊になる動機といった事が、この反乱の非典型性を惹起した。そのため、プランから判断すると、プーシキンは、この作品も、未完のまま中断したのである。彼がプガチョフの乱に関心を抱いたのは、一つには彼の反乱の中に、農民反乱の歴史的な意味を探ろうとしたからに他ならないだろう。

プーシキンの散文作品に於いては、農民の形象、彼らの生活についての描写は、貴族、首都の社交界や田舎の屋敷での彼らの生活の描写に比べて、はるかに簡略で、時には素描的でさえある。この事は、『史話』にもあてはまり、ベールキンの自伝の部分と、たとえば、トリフォンの治世の部分とを比べてみれば、その描写の緻密度の相違によって明らかである。極めて当然の事であるが、プーシキンは、自分自身の本来の環境である貴族社会については、農民のそれよりも、はるかに通曉していたのである。プーシキンが『史話』を中断した原因の一つがこの点にある。しかし、この事は、彼が、農民やその生活の典型的な側面を的確に捉え、芸術的にすぐれた形象に仕上げるのを何ら妨げるものではなかった。そして、彼によって『史話』やその他の作品で輪郭を描かれた諸形象は、後に、彼の伝統の継承者達によって、見事に発展させられるのである。

『史話』の中で、プーシキンは、ベールキン家の衰退とゴリューヒノ村民の搾取による零落という、極めて鋭い状況を描いているにも拘ら

ず、直接農奴制を批判する表現を、我々は見出さない。諧謔的な表現が随所に見出せるとはいえ、根本にあるのは極めて真面目な考察である。又、『史話』では、農民の側からの問題の再評価という姿勢がとられているが、だからと言って彼らを美化する事はなく、ソビエト期の批評では無視されている、農民の怠惰に対する皮肉の調子さえ感じられるのである。この『史話』の歴史叙述の手腕は、架空の作者ベールキンの芸術的能力——自伝の中で述べられている彼の文学の様々の試みの体験——から見て、彼の能力をはるかに越えた、優れた、リアルなものになっている。

プーシキンがこの作品の中で農奴制をどう考えていたかについて、次の引用をもって本稿を終えよう。「貴族と農奴の両者の利益を具体的に保証しつつ、あわせて農奴制廃止をおこないロシアを近代国家に転成させるという矛盾にみちた困難な課題の遂行こそが、ただザプロツキー＝デシヤトフスキーだけにとどまらず、体制側内部の進歩的勢力全体の行動の原理を形成していたのである」。⁽⁵⁰⁾ プーシキンは決して体制側の人間ではなかったが、この定義は完全に彼の場合にもあてはまるのである。

<注>

- (1) 以後、本文では、『史話』と略記する。
- (2) Janko Lavrin, Pushkin and russian literature, New York, Russell & Russell, 1969, p. 208.
- (3) 『エフゲニー・オネーギン』に於ける農奴制の描写の具体的な例については、たとえば В. Я. Брюсов, Мой Пушкин. (М.—Л., Госиздат, 1929, глава "Пушкин и крепостное право") を参照せよ。
- (4) А. С. Пушкин, Полное собрание сочинений, Изд-во АН СССР, 1937—1959, том 11, стр. 14—15. 以後プーシキンの作品からの引用はこの版により、注では、Пушкин とのみ記し、巻数、ページ数をその後に記す。傍点による強調は、指示ない限り全て引用者によるものである。
- (5) Пушкин, том 8/1, стр. 53.
- (6) Пушкин, том 11, стр. 258. Глава "Русская изба".
- (7) プーシキンのリツエイの同僚 М. А. Корф 男爵はこう書いた、「我が国の国内機構の現在の状態のもとでは、地主の権力は、専ら自分達の農奴の福祉にのみ向けられる必要がある。この権力の悪用は、高潔な身分を卑しめる事になり、破滅的

な結果をもたらし得るのである」(П. Е. Щеголев, Пушкин и мужики, М., Федерация, 1928, стр. 124)。体制側に立つ官吏の一人、ザブロツキー・デシヤトフスキーは、あくまで国家の経済的發展の道を妨げるものとして農奴制を捉え、「農奴制の撤廃が、領主にとってのみならず、他ならぬ農奴自身にとっても有利であることを、間接的にはあるが随所で指摘している。そして、この領主＝農奴の利益の一致こそが、結局ロシアを富ませるのだとの考えに立っていたのである」(彼は皇帝直属の農民問題秘密委員会の一員で、国有財産大臣であったП. Д. Ксериофの命令で、1840年代初めの領主経営の実態を調査したのである)(菊地昌典, ロシア農奴解放の研究, 御茶の水書房, 1964年, 131～134ページ)。

- (8) 菊地昌典, ロシア農奴解放の研究, 192 ページ。
- (9) Пушкин, том 14, стр. 79. 1830年4月16日付のセルゲイ・プーシキンの、息子あての手紙を参照せよ。
- (10) 1828年7月1日付のパヴリーシチェフの手紙, 「私の義父が極端なまでに吝嗇で、その上、経営に関しては素人だという事だけを言います。彼はニジェゴロド県に、千人以上の農奴を持っています。彼らを管理しているのは農奴で、彼は主人の利益の事は考えず、自分のポケットをふくらませて、しばしば主人には一文も残さない始末です。父の無関心と管理人のベテンのために、我々が窮乏に耐えねばならないのは明らかです」。ボボエードフの報告にはこう記されている, 「あなたの手紙により、私はプーシキン家の領地キステニョーヴォ村に行つて来ました。農民達はひどい状態であると言えます。この様な貧しさを私は余り見た事がありません。馬や牝牛を持たぬばかりか、鶏や、自分の住む家さえ持たぬ農民がいます。彼らの多くは、年貢のみならず人頭税さえも払う事が出来ません。……現在これらの農民には九千以上の借金があり、その様な状態のため、彼らの多くは墮落し、全くの浮浪人や酔払いになっています。耕作地はとても少く、森は全くなく、草原だけは十分にあります。これがキステニョーヴォ村の状態です」。(П. Е. Щеголев, Пушкин и мужики, стр. 87-88)。ボボエードフの報告で興味深いのは, 「牝牛」についての記述である。プーシキンの言葉を想起してみよう, 「牝牛を持つのは、ヨーロッパではどこでも贅沢の証拠である。我が国では、牝牛を持たないのが、恐ろしいほどの貧困の証拠である」(『モスクワからペテルブルグへの旅』の「ロシアの農家」の章, Пушкин, том 11, стр. 258)。
- (11) А. Г. Гкаер-Совьяは、その著書で『史話』の研究史について、簡潔で内容の豊かな概観を行なったが、その結論はソビエトの観点を見事に示している, 「ソビエト以前の批評家、研究者達が『ゴリューヒノ村史話』の中に未完の歴史小説、あるいは歴史家達に対するパロディを見出した一方、ソビエトの研究者達は、普通、『ゴリューヒノ村史話』の中で別の原理を強調している。即ち、まず第一に、プーシキンの同時代の農奴制批判が中心にある一連のリアリスチックな叙述、概観

- として作品を意義づけているのである」(А. Г. Гукасова, Болдинский период в творчестве А. С. Пушкина, М., Просвещение, 1973, стр. 224)。
- (12) А. И. Ревякин, История русской литературы XIX века (первая половина), М., Просвещение, 1977, стр. 267.
- (13) Пушкин, Итоги и проблемы изучения, М.-Л., Наука, 1966, стр. 470.
- (14) А. С. Пушкин в русской критике, М., Гос. изд-во худож. лит., 1950, стр. 429. С. А. Венгеровが1910年のプーシキン作品集第4巻で『ゴロューヒノ村史話 (История села Горюхина)』という表題に変えるまでは、プーシキンの作品は、『ゴロューヒノ村年代記 (Летопись села Горохина)』と呼ばれていた。ヴェンゲロフの論文“Горюхино, а не Горохино”を参照せよ (Пушкин, Собрание сочинений под ред. С. А. Венгерова, С. Петербург, Брокгауз-Ефрон, 1910, том 4, стр. 226)。
- (15) Н. Н. Стрaховはこう述べている, 「この作品でプーシキンによって輪郭を描かれたロシアの生活の特徴は, 真に貴重なものであり, 詳細に検討する価値があるだろう (たとえば, いわゆる農奴制を考えてみよう), 何故なら, これらの特徴の正しさ, それらの解明の真実は驚くべきものだからである。『年代記』の重要性は, プーシキンの活動に於いて, この作品から転換が始まり, 彼が『大尉の娘』で終る一連の, ロシアの生活から採った小説を書いた事から, すでに明らかである」(Н. Н. Стрaхов, Заметки о Пушкине и других поэтах, 2-е изд., Киев, 1897, стр. 54)。又, Н. И. Черняевは, 「『ゴロューヒノ村史話』は, ネナラドヴォの地主の手紙と関連して, 農奴制とそれが生み出した地主と農民の関係に対する辛辣な, しかし同時に芸術的な風刺と呼び得る。……ゴロューヒノ村民の零落は, 時がたつに従って, 農奴制と財産相続に関するロシアの法律の不可避の結果として起こるのである。……『ゴロューヒノ村史話』は, プーシキンが農奴制の影響下に出来上った日常慣習の明るい現われ (プーシキンと農民達の最初の出会いと農民達や老乳母に対する彼の態度) を否定していなかったが, 農奴制の暗い側面, 国の生産力や農耕階級, 地主自身の知的, 道德的発達に対する農奴制の有害な影響を, 見事に意識していた事を証明する作品の一つである」と述べた(Н. И. Черняев, Критические статьи и заметки о Пушкине, Харьков, 1900, стр. 564, 566, 571)。
- (16) А. Искoз, История села Горюхина. В кн. Пушкин, собрание сочинений под ред. С. А. Венгерова, С. Петербург, Брокгауз-Ефрон, 1910, том 4, стр. 241.
- (17) П. Е. Щеголев, Пушкин и мужики, стр. 79-80.
- (18) Там же, стр. 84.
- (19) Н. Н. Фатов, Пушкин и декабристы, М.-Алма-Ата, Автора, 1929, стр. 71.

- (20) Д. Д. Благой, Социология творчества Пушкина, М., Мир, 1931, стр. 233.
- (21) Е. А. Акулова, Наблюдения над языком и стилем "Истории села Горюхина" А. С. Пушкина, Ленинградский гос. пед. ин-т им. А. И. Герцена, Ученые записки, том, 76, Л., 1949, стр. 210.
- (22) Б. Томашевский, Историзм Пушкина. В его кн. Пушкин, книга вторая, М.-Л., Изд-во АН СССР, 1961, стр. 184-185.
- (23) М. Мальцев, Тема крестьянского восстания в творчестве А. С. Пушкина, Чувашское гос. изд-во, Чебоксары, 1960, стр. 95. Тоже см. его другую статью: Проблема социально-политических воззрений А. С. Пушкина, Ученые записки Чувашского пед. ин-та, вып. 12, Чебоксары, 1960.
- (24) Пушкин, Ито и проблемы изучения, стр. 483.
- (25) А. Г. Гукасова, Болдинский период в творчестве А. С. Пушкина, стр. 241. この著書のオリジナルであったと思われる論文は, "История села Горюхина" А. С. Пушкина, Московский гос. пед. ин-т им. В. И. Ленина, Ученые записки, том 70, вып. 4, Гос. учебно-пед. изд-во мин-ва просвещения РСФСР, М., 1954. である。
- (26) これに関しては, たとえば, Б. Томашевский, Пушкин, Современные проблемы историко-литературного изучения, Л., Образование, 1925, стр. 30-34. を参照せよ。
- (27) Пушкин, том 8/2, стр. 719. 下線部は, 原稿で省略されている部分, [] は, 書いた後で消されている部分を示す。各行の番号は, 便宜的に引用者が付したものである。プランの項目(8), (9), (10)はプランのどこに入るのか指示なく, 欄外に書かれ, (11)~(14)も, 欄外に書かれている。И. А. Шляпкинが1903年に発表したプランの順序は, 1-2-3-8-9-4-10-5-6-7 11-12-13-14 となっている。この順番は, 物語の現存の部分から判断して, 説得力を持っていると思われる。(И. А. Шляпкин, Из неизданных бумаг А. С. Пушкина, С.-Петербург, 1903, стр. 47)。
- (28) Пушкин, том 8/1, стр. 134-137.
- (29) Там же, стр. 137.
- (30) Там же, стр. 137.
- (31) Там же, стр. 138.
- (32) Там же, стр. 140.
- (33) Там же, стр. 140.
- (34) Там же, стр. 59-60.
- (35) Там же, стр. 60.

- (36) М. П. Алексеев, К. "Истории села Горюхина". В кн. Пушкин, вып. 2, Одесса, 1929, стр. 72-73.
- (37) А. Г. Гукасова, Болдинский период в творчестве А. С. Пушкина, стр. 247-248. М. П. Алехсеев³⁶も А. Г. Гук³⁷も、シリャプキンの発表したプランと同じ順序を採っている。注⑦を参照せよ。
- (38) См. Е. А. Акулова, Наблюдения над языком и стилем "Истории села Горюхина" А. С. Пушкина.
- (39) А. С. Пушкин, Полное собрание сочинений в десяти томах, Изд. второе, том 6, 1957, М., Изд-во АН СССР, стр. 765-766, および, プーシキン全集, 第4巻, 646 ページ (河出書房新社, 1972年) では, プランの中で, (7) の「反乱」だけが記されており, これをブガチョフの乱を暗示するものとして示している。勿論, プランに示されている個々の「反乱」のどれが暗示的なのか, という問題ではなく, 「反乱」という言葉の言及自体が暗示的なのである, という見方も可能であるが, より厳密に言えば, (7) の「反乱」は, やはりブガチョフの乱を暗示するものではないのである。
- (40) Пушкин, том 8/1, стр. 376.
- (41) Там же, стр. 181. ここで, 農民達の中で最も過激な者, 鍛冶屋のアルヒーブは, 後で署長達を屋敷に閉じこめて, 焼き殺すのである。
- (42) Пушкин, том 11, стр. 267.
- (43) М. Е. Салтыков-Щедрин, Собрание сочинений, М., Худож. лит., 1975, том 17, стр. 123, 446-447. プーシキンの『史話』に最も関連の深い作品として, 彼の『ある都市の歴史』が必ずと言って良いほど名を挙げられるが, それは, パロディ性の点, 風刺性, あるいは表題の点で関連付けられていると思われる。農奴制の描写, 農奴と地主の関係の考察という点ではこの『僻地の旧習』をも『史話』と関連させて論ぜられるべきであると思われる。
- (44) Б. Томашевский, Пушкин и народность. В его кн. Пушкин, книга вторая, стр. 145.
- (45) М. Е. Салтыков-Щедрин, Собрание сочинений, М., Худож. лит., 1974, том 16/1, стр. 182.
- (46) Пушкин, том 8/1, стр. 134.
- (47) Е. А. Акулова, "История села Горюхина" А. С. Пушкина. В кн. Пушкин в школе. М., АПН РСФСР, 1951, стр. 380.
- (48) Пушкин, том 8/1, стр. 139.
- (49) А. Г. Гукасова, Болдинский период в творчестве А. С. Пушкина, стр. 232.
- (50) 菊地昌典, ロシア農奴解放の研究, 137 ページ。

参 考 文 献

(本文中に引用しなかったものを示す)

1. В. Г. Белинский, Литературная хроника. В кн. В. Г. Белинский, Собрание сочинений, М., Худож. лит., 1977, том 2.
2. В. Сиповский, К литературной истории "Истории села Горохина". В кн. Пушкин и его современники, вып. IV, С.-Петербург, 1906.
3. В. Сиповский, "История села Горохина" (К литературной истории повести). В его кн. Пушкин, Жизнь и творчество, С.-Пб., 1907.
4. Виктор Острогорский, Очерки Пушкинской Руси, М., 1909.
5. Нестор Котляревский, Пушкин как историческая личность, Берлин, Научная мысль, 1925.
6. Н. А. Саввин, Болдино и А. С. Пушкин, Нижний-Новгород, Изд-во Нижегородской Археолого-Этнологической комиссии, 1929.
7. А. Грушкин, К вопросу о классовой сущности Пушкинского творчества, Л., Гос. изд-во худож. лит., 1931.
8. Д. Д. Благой, Творческий путь Пушкина. В его кн. Три века из истории русской поэзии XVIII, XIX, XX вв., М., Советская литература, 1933.
9. Д. Д. Благой, Значение Пушкина. Там же.
10. Д. П. Якубович, Обзор статей и исследований о прозе Пушкина с 1917 по 1935 г. В кн. Пушкин, Временник пушкинской комиссии, 1, М.-Л., Изд-во АН СССР, 1936.
11. И. Сергиевский, История села Горюхина. В кн. Литературное обозрение, 1937, No. 2, 25 января.
12. Ульрих Фохт, Проза Пушкина в развитии русской литературы. В кн. Пушкин, Родоначальник новой русской литературы, М.-Л., Изд-во АН СССР, 1941.
13. Н. Л. Степанов, Проза Пушкина, Московский гос. пед. ин-т им. В. И. Ленина, Ученые записки, том 70, вып. 4, Гос. учебно-пед. изд-во мин-ва просвещения РСФСР, М., 1954,
14. Н. Л. Степанов, Проза Пушкина, М., Изд-во АН СССР, 1962.
15. История русской литературы, том 2 (литература первой половины XIX века). М.-Л., Изд-во АН СССР, 1963.
16. А. Слонимский, Мастерство Пушкина, М., Гос. изд-во худож. лит., 1959.
17. Д. Д. Благой, Творческий путь Пушкина, М., Советский писатель, 1967.

18. А. Осоргина, Пушкин и его творчество, YMCA-Press, Paris, 1969.
19. Г. П. Макогоненко, Творчества А. С. Пушкина в 1830-е годы (1830-1833), Л., Худож. лит., 1974.
20. Н. В. Измайлов, Очерки творчества Пушкина, Л., Наука, 1975.
21. А. П. Сарычев, Проблема народности и критический реализм, М., Просвещение, 1975.
22. Декабристы рассказывают ..., М., Молодая гвардия, 1975.
23. Centennial essays for Pushkin, New York, Russell & Russell, 1937. (George Z. Patrick, Pushkin's prose writing).
24. Ernest J. Simmons, Introduction to Russian realism, Bloomington, Indiana Univ. Press, 1965.
25. John Bayley, Pushkin, Cambridge at the university press, 1971.
26. Walter N. Vickery, Alexander Pushkin, New York, Twayne, 1970.
27. 菊地昌典, ロシア文学と農奴制, (ロシア手帖の会, ロシア文学への招待, 三省堂, 1978)。